【オーラルセッションⅣ】 「その他」

「日本流の人と犬との暮らし方」

中塚 圭子 氏
環境人間学博士人とペットの共生環境研究所

○笹井　それでは、引き続きまして、次の演題に移らせていただきます。次は、「日本流の人と犬との暮らし方」ということで、中塚先生にまずお話ししていただきまして、あと、共同の演者の先生が牧田先生、大畑先生、石田先生、吉田先生、湯木先生という名前が書かれてあるんですが、その中で４人の先生が交代でプレゼンテーションしていただくということで、中塚先生は私が紹介させていただいて、後はバトンタッチで発表者が移られるということでお願いいたします。では、よろしくお願いいたします。

○中塚　それでは、「日本流の人と犬との暮らし方」を、人とペットの共生環境研究所の研究成果として発表いたします。私は所長の中塚圭子でございます。よろしくお願いいたします。[スライド1]

ここ数年来ペットブームも定着し、熱心に犬と関わる人も増えてきています。その一方で、取り立ててしつけ教室に通うわけでもないのに、普段の暮らしの中で飼い犬といい関係を築いている人がいることも事実です。なぜそのような関係が築けるのでしょうか。現在普及している犬のしつけは欧米から導入されたものが主であり、日本では犬文化が醸成されていないというのが定説でした。また、人間と動物との関係が欧米的な管理するものとされるものという画一的なものに留まってい感も否めません。しかし、犬に関わる問題を解決しようとすると、これまでは獣医学や動物行動学中心のいわゆる「科学的なしつけ」が中心でした。私はドッグトレーニングのインストラクターもやっているのですが、しつけ教室では科学的なしつけが一番主流になっております。つまり、コマンドを出す、それに犬が従って動作ができ上がるという形です。[スライド2]

なかなか、それではうまく暮らしていくことができないという人がしつけ方教室にやってきます。しつけ教室は、「しつけ」という言葉ではなく「暮らし方」に変えていくという転換期に来ているのではないかということから、今回の研究が始まりました。

研究の目的は、現在、日本において犬と人との良好な関係性を導くものはどういった方向があるのか、どういったものがあるのかを調査し、明らかにしていきます。[スライド3]

本発表では、犬に関わる問題を解決するために行われた、フレンチブルという犬種に焦点を当てた「フレブルユルユル教室」、フレンチブルと言うのは、最近人気犬種なのですが、喧嘩っ早くて、頑固。その、犬とどう暮らしていくのかについて発表します。

次に、姫路市動物管理センターで行われた、「怖がり犬との暮らし方教室」、昨今の殺処分ゼロで浮かび上がってきた、人とうまく生活できない野犬の譲渡ゆえに出てきた動物管理センターならではの問題なのであります。

最後に、但馬地方地域の特色を生かした関わり方、　但馬で出会った「猟師と猟犬梅ちゃんとの暮らし方」について、調査いたしました。

これら３つの調査結果を、飼い主と犬を取り巻く環境や地域社会の在り方を研究するといった環境人間学的立場から考察することにより、日本の暮らしや日本人の動物観に合った共生環境を導き出したいと考えます。[スライド 4]

それでは、フレブル教室からお願いいたします。

○牧田　それでは私から、フレンチブルドッグを集めたユルユルフレブル教室についてお話しをさせていただきます。[スライド5]

５年前には人気犬種、……ランキングの10位圏外だったフレンチブルドッグが、2011年から2014年にかけて10位以内にランクインされ続けています。今では、街のあちこちでフレンチブルドッグを見ることが多くなりました。去年、とある飼い主さんからこんなことを聞いたんです。うちの子は落ちつきがなくて、一般のしつけ教室でほかの飼い主さんに迷惑をかけてしまうのではないかという御相談をいただきました。このことを聞いたことをきっかけに、フレンチブルドッグのためのユルユル教室をスタートさせました。[スライド6]

フレンチブルドッグは、もともと闘犬だったブルドッグを愛玩犬に改良した犬です。このワンちゃんの特徴は、テンションの高い独特な行動、ほかのワンちゃんからは読みづらいボディーランゲージです。このボディーランゲージから、ほかの犬から警戒されたり、避けられたりする傾向にあります。飼い主さんもそういった経験をたくさん重ねてこられますので、「どうせうちはフレンチだから…」と、うちの子に関してのしつけの諦めの感情を持っておられることが多いです。[スライド7]

なぜフレンチブルドッグがほかの犬から嫌われやすいのかをテーマにお伝えをするフレンチブルドッグの教室を開催し、また、この教室の中でサブテーマとして「しつけをする」という内容で教室を行う取り組みを去年の秋から開催しました。それがユルユルフレブル教室です。[スライド8]

この少し砕けたタイトルからも、飼い主さんも緊張せずに参加ができるという感じを出し、気軽に参加する工夫をさせていただきました。教室では、普通のお教室とは違い、他犬から目をそらす、または他犬との接触を避ける工夫をすることで、フレンチブルドッグの飼い主さんにどういうふうにほかのワンちゃんとかかわっていったらいいのかをメインにお話をします。そのお話をしているときに、「あっ、だからうちのワンちゃんはほえられるんだ」とか、「だからうちの子は嫌われるんだ」とか、私がフレンチブルドッグのこういう特徴の話をしていると、「ああ、うちもあるある！」みたいな声を上げてくださる方もいらっしゃいます。[スライド9]

講義の後は簡単なしつけをするんですが、従来のしつけ、いわゆる訓練競技会で行われているようなしつけの定義ではなくて、お座り、待て、おいでという生活に必要な最低限のしつけをしています。右側に、ゴールデンレトリーバーがきちんとお座りをしている図があるのですが、左側にはフレンチブルドッグ特有のいわゆるフレブル座りという、飼い主さんが愛情を込めて呼ばれる呼び方があります。教室ではちょっと足を崩したようなこのお座りでもオーケーという定義にしています。一般の訓練の競技会ではちゃんと４本足できちっと座らないといけないですが、そういったことは細かく指示はしないです。それでもオーケーというような、しつけの内容を緩くしております。[スライド10]

この教室の結果として、「どうしてうちの子が嫌われるのかわかった」ということと、あと、うちの子のことを理解することもそうなんですが、「他のワンちゃんのボディーランゲージを学ぶことも大事だ」ということを感じていた

だけ、また、「フレンチと以前は暮らしにくかった」、「ほえられたりするから、ちょっと避けて散歩しなきゃいけない」というのが、この教室に参加することによって、フレンチブルドッグというワンちゃんの性質を認めて、一緒に暮らすのが楽しくなったと飼い主さんからのお喜びの声もいただくようになりました。[スライド11]

日本では犬種の流行があります。今回のこのフレンチブルドッグの教室案もそうなのですが、急激に人気が出てきて、20年ぐらいには、友人が実際に白のフレンチブルドッグを連れて散歩していた時に、子供さんが「あっ、豚ちゃん連れて歩いてる」とおっしゃったそうなんです。今は小さいお子さんでも、「あっ、フレンチブルドッグ」とわかるぐらい犬種の認知がされるようになってきました。今後もまた、もしかしたらこういう犬種の流行が出て来た時に、「すべての犬種は訓練競技会で行うようなきちんとしたしつけをする」という一定の考えではなくて、その犬種に応じた、飼い主さんとの暮らしに応じたしつけの仕方をしていくことが、今後、人と犬が暮らしやすくなるようなヒントになるんじゃないかなと、今回の私の取り組みで感じました。

以上、私から発表を終了いたします。

○大畑　性格別のかかわり方です。憶病な犬を集めた「怖がり犬との暮らし方教室」を発表します。大畑奈緒美と申します。よろしくお願いいたします。始めに、私はＪＡＨＡ認定、犬のしつけのインストラクターをしております。また愛護推進員もしております。[スライド12]

姫路市では、開業獣医師会、動物愛護協会主催のしつけ方教室を動物管理センターで開催し、12年前より担当しております。その間、１歳までの犬を対象としたジュニアクラス、譲渡犬を対象としたフォローアップ教室を開催しておりました。2014年６月より、飼い主、犬の高齢化、犬種登録の変化な犬を取り巻く環境に対応し　号令を教え、互いが頑張るしつけ方教室ではなく、しつけ方教室という名前ではありますが、飼い主の困っていることに細かく対応した12項目から選べる個々の暮らし方教室を始めました。例えば和犬限定、老犬限定、高齢者の飼い主さんが対象のクラスなどです。[スライド13]

今回は、怖がり犬限定のクラスの報告をさせて頂きます。参加者はＣちゃん、Ｄちゃん、Ｇちゃんの３家族でした。Ｃちゃん、Ｄちゃんは雑種の譲渡犬です。Ｇちゃんはバーニーズです。

レッスン１項目は、怖がり犬の性格を共有するために事前アンケートをし「うちの子あるある」で当てはまる物に挙手してもらいました。結果は、犬が怖がっているものは家から離れる事　その他でした。飼い主が気にしている事は、散歩中に怖がっている時の対処法が知りたい。散歩が中心なので楽しそうに歩いてほしい。散歩が犬のためになっているのか、ストレスがかかっているのでは。辛そうなのを少しでも楽にしてやりたい等の愛犬の心情を救いたいとの事でした。これらを発表することにより、皆さんに共通の意識効果が見られました。[スライド14]

２項目は、怖がりを治す犬とのとレッスンです。１、飼い主が自信を取り戻すことを伝える。２つ目は、怖くない環境でまず慣せる事を知る。３、怖いものがあった時の対処する方法を実践するため、皆で敷地内を３周回る散歩をしました。

内容は、１、犬に無理をさせない。特に、お座りの号令はかけない事でストレスを軽減させる２、怖くて逃げ出しそうな時は飼い主が、「あらあら大丈夫よ」と声をかけ一緒にうろたえない事。３、怖がっている犬にばかり集中せずに、参加者同士で話しかけながら歩くことを実践してみると、その結果１周目は、初めての

所でびくびくしていた3頭も３周目では話しながらのんびり歩けるようになりました。

最後はコスプレ記念撮影をしました。Ｄちゃんのお母さんは「こんなかわいいと言ったのは初めてやわ」など、犬達もリラックスした様子で楽しく終了できました。[スライド15]

その後の教室で、Ｃちゃんのお母さんが犬の様子を御報告くださいました。「当日来るときは怖がって歩けず、私も気が滅入っていたのに、会場から帰る時には楽しそうに歩いて帰りました。私も胸を張って歩いてみました。現在は楽しそうに歩くことが増えました。これもこの子の個性だからと、安心しております。」とのことです[スライド16]

最後に、現在のしつけ方教室では、号令をかけるタイミングや、フードで気をそらす方法、克服できない刺激をずっと繰り返す方法がとられておりました。それよりも、同じ悩みを持つ飼い主さん同士が集まり、犬の良いところを見つける方がとても効果的で、飼い主が自信を持つことで犬の怖がりが軽減するという事がわかりました。

以上です。

○ 石田　次に、但馬で見つけた人と犬との共生の風景についてお話ししたいと思います。石田美樹と申します。よろしくお願いします。

すてきな風景でしょう。これはテンプレートでも何でもなくて、私が実際に撮った写真です。私はこのようなすばらしい景色に囲まれた兵庫県北部但馬地方で、数年前から週の半分を過ごしています。但馬には都会にないすばらしい風景がたくさんあります。本発表では、その中で見つけた人と犬との豊かな共生の形の１つを皆様に御紹介したいと思います。[スライド17]

但馬地方は兵庫県北部のこのあたりの呼び名です。私が出会ったうめちゃんは、豊岡市竹野町に住む猟犬です。猟犬の役割は、ハンターと共に山に入り、鹿やイノシシの臭いをかぎ分け、見つけ出し、追い立てることです。その猟に５カ月でデビューしたうめちゃん。両親が猟犬とはいえ、もちろん最初からはうまくはいきません。でも、無理やり人が教えるよりも、犬の学習するペースを大事にし、仲間の犬と一緒に行動させている方が自然に上達していったそうです。合図に使う笛の音も、経験を重ねるうちにちゃんと御主人の音を聞き分けるようになりました。うめちゃんはもうすぐ２歳。今、飼い主のKさんと共に、豊岡市猟友会鹿専任班として活躍されています。[スライド18]

飼い主のKさんは大阪から帰ってきて９年になりますが、鉄砲による猟歴はまだ４年。鉄砲を持つまでは、何と犬を飼ったことがなかったそうです。先輩猟師から譲り受けた５歳のベテラン犬と初めて猟に入った時、ものの30分もしないうちにイノシシを見つけてきて、「犬とは何てすごいんだ!」と感動した瞬間を、今でも忘れられないそうです。[スライド19・20・21]

子犬から育てるのはうめちゃんが初めてでしたが、こうして立派な猟犬に育てられたのは、猟仲間みんなで犬の成長を見ていることがとても大きいとKさんは言います。しつけに関しても仲間の目が一番厳しいからね！と、笑っていらっしゃいました。この地域のハンターたちは、「猟犬といえども他の人や犬に対して決して攻撃的でないことが大切」と考えています。なので、心豊かな犬に育つ様、子犬のときから多くの人に会わせたり、他の犬と行動させたりするということも、仲間みんなでかかわっているそうです。[スライド22]

私は、これらのような話はしつけ教室で体験しました。それを地域の中で取り組んでらっしゃることに、私はとても感動しました。

また、ハンターが高齢になって狩りを引退するときは、まだ犬が仕事を続けられるように、仲間同士で犬の里親を見つけることもあるそ

うです。もちろん犬が引退した場合も処分などせず、どのように家で余生を過ごしているか、仲間はみんな知っています。犬たちの暮らしそのものを大切に考える仲間のつながり。「猟師が鉄砲と犬に対して責任を持つのは当然です」とKさんは言葉を強くしておっしゃいました。

[スライド23]

これらの話から、犬たちは個人の犬というわけでなく、地域の犬と認識され、生まれてから生涯を全うするまで地域全体で見守られていることがわかりました。そこから見えてきたものは、大きな規則とかマナーとかではなく、人同士のかかわりとその地域の暮らしのスタイルから生まれた小さなローカルルールが、人と犬との暮らしを大きくつなげているのだという事でした。[スライド25]

民俗学者の柳田國男は「美しき村」という著書の中で、「村は住む人のほんのわずかな気持ちから美しくもまずくもなるものだ」と書いています。まさに私は、この豊岡市の猟犬たちの暮らしから、その心遣いが美しい共生の風景にたどり着く原点なのではないかと実感したのであります。

雄大な自然の中で、思う存分自分の力を発揮しながらたくましく生きる犬達。そしてその力を尊重し、育む人々。強さと温かさを感じたすばらしい風景でした。私はこのようなすばらしい但馬の風景をこれからもいっぱい感じながら、自分の犬達とも温かく暮らしを育んでいきたいと思いました。

○中塚　全部をまとめてみますと、このようになります。[スライド26]

犬種の特徴を捉えるということでは、愛犬の犬種の特徴を捉えることにより、愛犬の性格を理解すすることができました。また、それが飼い主の安心感につながっておりました。また、犬種間で起こるトラブルには、犬種の特徴を生かした回避の方法を知ることができました。

性格に焦点を当てることで、同じ悩みを持つ飼い主が集まることで似たような性格の存在を知ることができました。それは、飼い主の安心感につながり、ひいては犬が落ち着くことに繋がっていきました。

地域の特徴を捉えることでは、但馬地方の猟犬の皆さんには、「地域の犬」という感覚が存在していることが分かりました。犬は、仲間の人や猟犬が全員で子犬を育て、終生面倒を見ております。また、独自のローカルルールがマナー向上にもつながっておりました。

つまり、それが全部飼い主さんの安心感につながり、そのことにより犬の心が安定し、そして問題が解決するという考え方を、しつけ方教室、いわゆる飼い方教室の中に取り入れることを提案いたします。

結論です。つまり、１）飼い主は、共通項を持った人がつながることで悩みや不安が解消すること２）犬の性格は人間が矯正することはできない場面もあると認めることが、かえって飼い主の自信や安心感につながること３）犬は、犬の個性を尊重し、あるがままの姿が生かされることで、人と共生してゆけると考えられること、４）犬種、性格、地域の特色といった、多方面からの取り組みをすることにより、人と犬との関係性は親密になることができると推察されます。以上4点を捉えることができました。

すなわち、犬は犬の個性を尊重し、あるがままの姿が生かされるそのときに、人と共生していける。あるがままの姿を削って人と一緒に共生するのではなくて、それを生かしつつ共生していくことがこれからの共生のあり方ではないかと結論づけました。

そうかといっても、管理をしないわけじゃないのです。先ほどのユルユルフレブル教室の中でも、基本的な号令とか形などは教えるのですが、それのみならず犬種や性格、地域の特色と

いった多方面の取り組みをすること、これが日本流だと私たちは考えております。つまり、日本人というのは、こちらの文化をパクッ、あちらの文化をパクッ、パクッと食べながら、しかも自分たちの文化はそのまま温存してグローバル化し、その時代の流れの変化に対応してきました。日本に入ってきた文化に加え、自分たちの昔ながらの文化を再確認してもう一回それを認めてみようということだと思うのです。[スライド27]

以上で発表を終わります。御静聴ありがとうございました。人とペットの共生環境研究所では、今後もこのようなより良い共生場面や共生空間の発掘、古来からあった日本流の暮らし方の再評価を行う所存でございます。[スライド28]

○笹井　どうもありがとうございました。きょうは多岐にわたる発表だったんですが、ここの学会のテーマは、阪神・淡路大震災から20年たって、人と動物のかかわりをということで、その中で犬という動物を通して、いろんな性格があったり、飼い主の方にもいろんなキャラクターがあって、その中でどうやってうまく世間を渡っていくのかのさまざまな例を挙げていただいたということになると思います。

まずは、フロアから何か御意見とか御質問等ありましたら、いかがでしょうか。よろしいでしょうか。では、私なんですが、まず１つ目のフレンチブルドッグのユルユルですが、そういう発想に至った一番の根本的な思いは、大体発表の中で言っていただいたんですが、ワンポイントでここやというのは、いろんな犬種で多分いろんなことがあると思うんですけれども。

○牧田　私の知人が、フレンチブルドッグのグッズを扱うオーナーズショップをやってるんですが、そこに来られる飼い主さんの多くがフレンチとか鼻ぺちゃのワンちゃんが多くて、そういった犬種がこの犬種の特徴で、ほかの犬種とはボディーランゲージをとりにくいのもあり、飼い主さんが言うことが、一般的なしつけ教室には行くんですけれども、やっぱり自分の犬がガウーといってしまったりとかトラブルの対象になるので、通ってはいるんですけど、やめざるを得ない。何か雰囲気的に、あの子ねみたいな感じで、いつまでたっても自分の犬が進歩しないということで気持ちが沈んでいってしまう。そういう声が多かったので、じゃあ、その子たちのためにということでお教室をつくることにしました。

○笹井　よくわかりました。いろんな犬種にいろんな特徴がある中で、やっぱり一番問題が多いところということで取り組まれたという。ありがとうございました。

次は、憶病な性格を選ばれたというのは何か。

○大畑　憶病な犬は、先ほど牧田さんがおっしゃいましたが、お座りとか伏せとかいう次元の問題ではないんです。基本的にずっとしっぽが中に入っている、びくびくして動かないというところなので、でも、通常のしつけで直るのではないかと皆さん期待されるんです。すぐ直るのではないかと期待されるので、時間がかかったり、違う方向からもあるよというのを飼い主さんに理解してもらうために、ワンちゃんにというよりは飼い主さんに理解してもらうために始めました。

○笹井　なるほど。なかなか直らない、その悩みを持ってる人がたくさんおれば、うちの子も直れへんねやということで共感が持てる、極端に言うとそういう。なるほど、わかりました。

最後は猟犬のお話だったんですが、猟犬のお話は、日本の中でずっとはぐくまれている、人間のために働いてくれている動物の代表例で

何百年も残っている。そこで特徴的なことというのは、今、地域の犬というのは、これは但馬地方だからそうなんでしょうか。それとも、ほかのところに行ってもそうなるんでしょうか。

○石田　私は今回の猟犬の話は但馬で伺ってきたので、他の地域も一緒かどうかと聞かれるとちょっとわかりません。他県で猟犬の話を聞いた時は、人には合わせられないとか、人も襲ってしまう犬も居るので他人とは接触させないという話も聞いたことがありますので、やはりこの温かさと穏やかさ、繋がりを大切にしようという特色は、但馬地方のカラーではないかなと私は感じました。

○笹井　ありがとうございます。景色も非常にきれいで、豊かな心を持った方が多い、どこもそうなんだと思いますが。しつけということで、ここのテーマの１つでもあるんですが、これからは災害が起こったときにしつけができてない動物は、幾ら飼い主の方が一緒にいたいと言っても一緒にいられないですね。

ですからそういうところを、ここに来られてる方には釈迦に説法だと思いますが、一般に動物を飼われてる方が、本当に災害が起こったときにほかの動物といられることが最低限の条件になると。お互いさまで、当然ちょっとぐらいのことだったら許してもらえるんですが、災害時は人も動物も究極のところに至っていますので、人も犬も動物もできるだけ自分のことは自分でできるようにということであると思います。

きょうのこのテーマはそこに非常に根差して、いろんな性格の子がいて、いろんな犬種がいて、いろんな地域の方がいて、その中でもいつ災害が起こるかわからない。日本の地面の上に住んでいる人間が考えなければいけないことを提案していただいたかもなと思います。

何か、ほかにフロアで、私ばっかりしゃべってるんですが、いかがでしょうか。よろしいでしょうか。そうしたら、ありがとうございました。また機会がありましたら、次のようなことでお願いいたします。

「日本流の人と犬との暮らし方」
Japanese people way how to live with their dogs

中塚圭子（環境人間学博士　人とペットの共生環境研究所）
Keiko Nakatsuka (human　science and environment doctor,
Coexistence environment laboratory of humam and pet)
牧田明美（ペットマッサージインストラクター）
Akemi Makita (pet massage instructor)
大畑奈緒美（JAHA認定家庭犬しつけインストラクター）
Naomi Ohata (JAHA authorization home dog training instructor)
石田美樹（人とペットの共生環境研究所）
Miki Ishida (Coexistence environment laboratory of humam and pet)
吉田美保（人とペットの共生環境研究所）
Miho Yoshida (Coexistence environment laboratory of humam and pet)
湯木麻里（獣医師）Yuki Mari (veterinarian)

スライド1

現在普及している犬のしつけ
Currently prevalent　Dog training

・日本では犬と暮らす文化が醸成されていない

Dog culture has not been building in Japan

・人と犬との関係は欧米的な管理するものとされるものという画一的なもの

Commonplace that thing relationship between people and dogs, which is assumed to West

・問題解決　Troubleshooting

＝欧米から導入された獣医学や動物行動学による「科学的なしつけ」

"scientifically the training" by the veterinary and animal behavior that has been introduced from the West

スライド2

目的

purpose

日本に於いて、人と犬との良好な関係性を導くものを調査する

Research the ones leading to good relationship with the Japanese People and Dogs

2015/7/20 ICAC KOBE　Coexistence environment laboratory of humam and pet　3

スライド3

調査対象

犬種による関わり方 How to involve different breed of dog

フレンチブルドッグを集めた
「ユルユルフレブル教室」

focused on French bulldog "Easy going classroom for French bulldog",

性格別の関わり方 How dog 's personality related to another

臆病な犬を集めた
「怖がり犬との暮らし方教室」

"living classroom of a unnecessar dog scared only "

地域の特色での関わり方 How to involve in the features of the local

但馬で出会った
「猟師と猟犬梅ちゃんとの暮らし方」

Met in Tajima "living with the hunter and Hound dog ume-chan"

2015/7/20 ICAC KOBE　Coexistence environment laboratory of humam and pet　4

スライド4

Focused on French bulldog “Easy going classroom for French bulldog

フレンチブルドッグを集めた
「ユルユルフレブル教室」　牧田明美

撮影者　馬殿彰子　2013/02/12
Photographed by AKIKO BADEN

2015/7/20 ICAC KOBE　Coexistence environment laboratory of humam and pet　5

スライド5

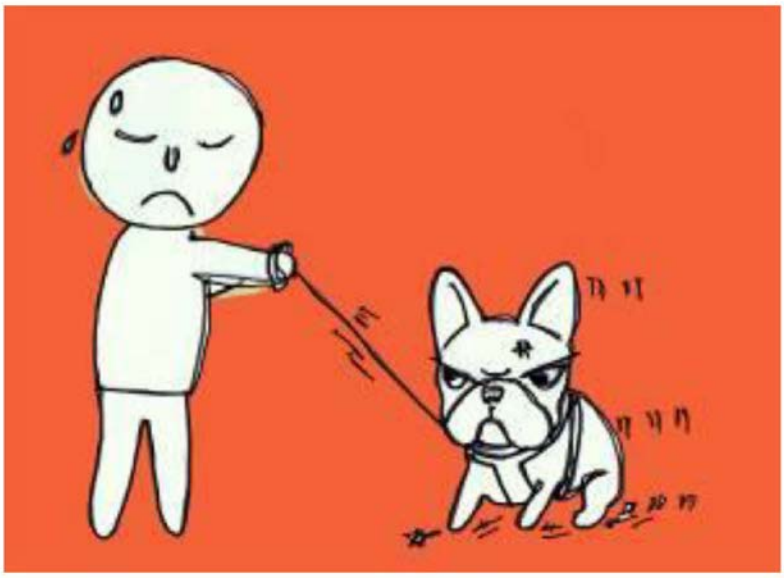


Illustration by Buuchie Ekizo

2015/7/20 ICAC KOBE Coexistence environment laboratory of humam and pet 6

スライド6

Illustration from Google Free materials

2015/7/20 ICAC KOBE Coexistence environment laboratory of humam and pet 7

スライド7

撮影者　牧田明美 2015/0215
Photographed by Akemi Makita

2015/7/20 ICAC KOBE　Coexistence environment laboratory of humam and pet

スライド8

撮影者　牧田明美 2015/02/15
Photographed by Akemi Makita

2015/7/20 ICAC KOBE　Coexistence environment laboratory of humam and pet　9

スライド9

Illustration from Google Free materials

2015/7/20 ICAC KOBE Coexistence environment laboratory of humam and pet 10

スライド10

撮影者 牧田明美 2015/02/15
Photographed by Akemi Makita

2015/7/20 ICAC KOBE Coexistence environment laboratory of humam and pet 11

スライド11

スライド12

スライド13

	C犬2歳（雑種譲渡犬） 外飼い	D犬5歳（雑種譲渡犬） 外飼い	B犬3歳（バーニーズ） 室内飼い
恐いもの	・散歩・家から離れる事 ・刺激物・車道・風の音 ・他犬の飼主・公園の子供	・家から離れること ・声の高い人・子供 ・ガソリンスタンド	・刺激物・車道・風の音 ・来客
吠える時	・ほとんどない ・吠えるがすぐ逃げる	・ほとんどない ・吠えるがすぐ逃げる	・吠えない
好きな事	・他犬との遊び ・どの犬とも友好的 ・あぜ道・野原	・あぜ道・野原 ・朝夕40分散歩に行っている	・犬との遊び・ハウス ・あぜ道・野原 ・たくさんの散歩
気にしている事	・14歳の同居犬と一緒でなければ散歩に行けない ・散歩の度にストレスがかかっているのではないかと心配でかわいそう	・フォロアップ教室で個性だと聞いていたが5年経ったのに治らないので心配	・ドッグラン内で逃げたり、怖がっていて他犬と楽しく遊ばないので困っている

2015/7/20 ICAC KOBE　Coexistence environment laboratory of humam and pet　14

スライド14

帽子を乗せる
⇓
可愛いと思う
⇓
犬の緊張が解ける

To put the hat?
I think cute!
It solvable　tensions dog

2015/7/20 ICAC KOBE　Coexistence environment laboratory of humam and pet　15

スライド15

結論（Conclusion）

怖がる刺激を克服させようとするよりも

Rather than attempts to overcome the stimulus that scared

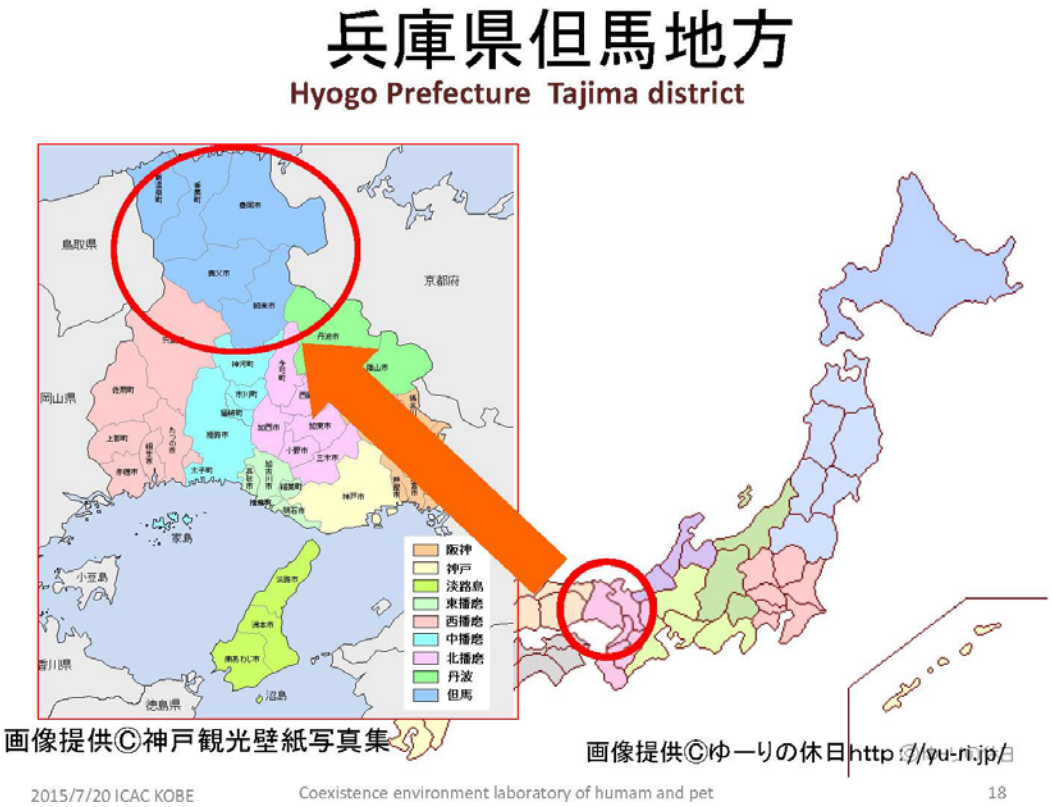
同じ悩みを持つ飼主が集まり
犬の良い所を見つけて自信を持つ事で
犬の怖がりが軽減する

Owners gathered with the same problem
The thing with the self-confidence to find a good dog character
Dog scared to reduce

2015/7/20 ICAC KOBE　Coexistence environment laboratory of humam and pet　16

スライド16

スライド17



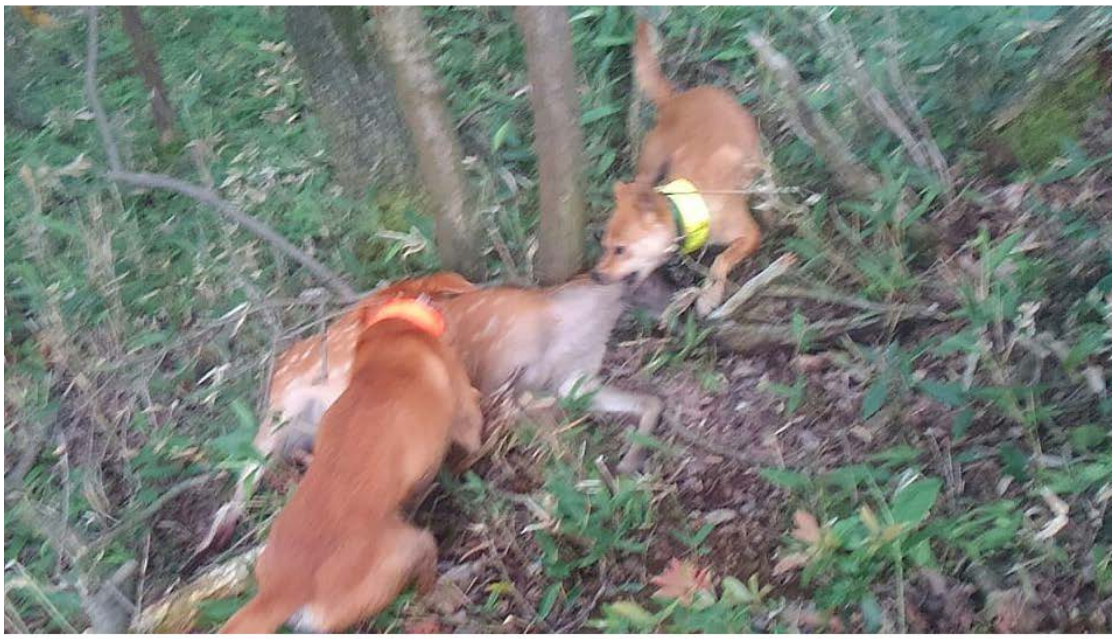
スライド18

スライド19

撮影者　加藤和彦　2015. 6. 23
Photographed by KAZUHIKO. KATO

2015/7/20 ICAC KOBE　Coexistence environment laboratory of humam and pet　20

スライド20



撮影者　加藤和彦　2015. 7. 6
Photographed by KAZUHIKO. KATO

2015/7/20 ICAC KOBE　Coexistence environment laboratory of humam and pet　21

スライド21

スライド22

スライド23

スライド24

スライド25

ペットとの関わり方 How relation in pet

犬種別 species dog

犬種の特徴を捉える
→愛犬の性格を理解する
→飼い主の安心感につながる
It grasp the features of dog species
→ understand the
→ lead to the kind of the owner

犬種間で起こるトラブルには、回避方法で対処
Trouble that occurs between the dog species, the dealtwith in workaround

性格別 another personality

同じ悩みを持つ飼い主が集まる
→似たような性格の存在を知る

Gathering the owner with the same problem
→ the presence of personality similar I find

地域別 the local

猟師に「地域の犬」という感覚の存在
→人や犬が子犬を育て～終生まで面倒を見る

The presence of a sense of "local dog" to the hunter
I take care → people and dogs to ~ lifelong grow puppy

ローカルルールが歩み寄りを起こす
Local rules causes a walked up

飼い主の安心感につながる→犬の心が安定する

Lead to the owner of the peace of kind → Dogs of mind is stable

2015/7/20 ICAC KOBE Coexistence environment laboratory of humam and pet 26

スライド26

結論（日本流の暮らし方）

1）共通項を持った人がつながることで悩みや不安が解消すること

2）犬の性格は人間が矯正することはできない場面もあると認めることが、かえって飼い主の自信や安心感につながること

3）犬は、犬の個性を尊重し、あるがままの姿が生かされることで、人と共生してゆけると考えられること

4）管理、犬種、性格、地域の特色といった、多方面からの取り組みをすることにより、人と犬との関係性は良好になることができると推察される

2015/7/20 ICAC KOBE Coexistence environment laboratory of humam and pet 27

スライド27

謝辞

Acknowledgments

ご清聴ありがとうございました。

Thank you everyone

スライド28